様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０８６３

研究課題名（和文）南アジアにおけるペルシア語出版史の基礎的研究

研究課題名（英文）A preliminary study of history of Persian printing in the South Asia

研究代表者
真下　裕之（Mashita, Hiroyuki）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：７０３０３８９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,600,000円、（間接経費）　1,080,000円

研究成果の概要（和文）：近代以前の南アジアではペルシア語が行政上の文書や学術・文芸の著作などの媒体として社会に広く普及していた。一方、出版という新技術が導入された近代以降においてもなお、ペルシア語著作が出版物の重要なレパートリーであり続けたことの実態とその意味は、十分に研究されてこなかった。本研究では、その研究のための基礎作業として、南アジアで行われたペルシア語作品の出版物についてのコーパス（総合的な目録データベース）を作成するため、目録類などの参考書、古典籍の公刊本を多数入手したほか、未公刊の古典籍については手写本資料の調査も行うことによって、所要のデータを収集した。

研究成果の概要（英文）：Persian was widely used as the literary language for not only administrative documents but also writings of art and science in the pre-modern South Asia. On the other hand, the details and the conditions of the Persian printings and their historical meaning in the modern South Asian societies after the introduction of the new technology are yet to be thoroughly studied. As a preliminary step toward studies of the subject, this study aims to build a comprehensive database of Persian books printed in the South Asia. Through this grant, much of necessary material has been collected by procuring reference works such as library catalogues and bibliographical list as well as published editions of classical Persian writings and by conducting researches on unpublished manuscripts.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：出版史　ペルシア語　南アジア

１．研究開始当初の背景

(1)　ペルシア語はムガル帝国時代までに、文語表現の媒体として南アジアにひろく普及していた。すなわちその時期には多くの公文書がペルシア語で書かれ、文学や学術の様々な所産がペルシア語によって記録されたのである。18 世紀前半以降、ムスリムの後継諸国家、非ムスリムの新興諸国家、英国をはじめとする欧州諸勢力が南アジア各地方に分立したことによって、ムガル帝国はゆるやかに解体していくが、このような政治情勢にもかかわらず、ペルシア語文化は南アジア史の中でしばらくの間存続した。このことはペルシア語文化の展開が、ムスリム政権やイスラーム文化と一定の関係を持ちながらも、本質的には次元の異なる現象であったことを示している。南アジア史のペルシア語文化に関する個別の文化史的記述を要する所以である。

(2)　従来研究は 18 世紀以前の南アジアにおけるペルシア語文化の盛行とその諸相を記述することに注力してきたのであるが、研究の視野から完全に欠落していたのはその後、すなわち 18 世紀末以降の南アジアにおけるペルシア語文化の展開である。一般にその展開はペルシア語の退場と近代インド諸語の登場という文脈において記述される。しかしこのような趨勢にありながらペルシア語がなお強固に通用していたことは、東インド会社社員の教育機関フォート・ウィリアム学院の語学教育の中でペルシア語が最も重視されていたこと、などに事実によってはっきりしている。18 世紀末以降 19 世紀の南アジアにおけるペルシア語文化史は、従来研究の想定よりもかなり複雑な道程をたどったものと考えられるのである。したがって本研究は、単に研究史上の欠落を埋めるに留まらず、近世史から近代史への南アジア史の転換期の一端を明らかにする効果も狙って構想された。

２．研究の目的

(1)　本研究の目的は、18 世紀末から 19 世紀にかけて南アジアで行われたペルシア語文献の出版の展開を解明することを通じて、南アジアの文化史上に占めるペルシア語文化の新たな側面を明らかにすることである。

(2)　本研究は、ペルシア語がプレスティジを失うに至るまでのこのように複雑な要因を整理することによって、ペルシア語の文化史的な意味を明らかにすることを目的とするものであり、その手がかりとして出版に着目する。南アジアにおいてアラビア文字の出版が本格的に始まるのは 18 世紀末のことである。他の近代インド諸語による出版もおおむね同じ時期に始まっているので、同じスタートラインから出発した各言語の出版史との関係において、ペルシア語が果たした文化史上の位置を正確に把握することが目的である。

(3)　本研究は、南アジアにおけるペルシア語文化が迎えた大きな変動のなかに、出版という新技術の展開を位置づける試みでもある。ペルシア語文化に即した文化史は 16 世紀以降の最盛期から 18 世紀末を経て 19 世紀末にまで至る一連の流れを呈している。出版という「近代」の所産を「前近代」以来の文化史の中に回収することによって、「近代」「前近代」という区分とは異なる転換期のインド史の歴史像を浮かび上がらせることも本研究の副次的な目的である。

３．研究の方法

(1)　本研究では 18 世紀末から 19 世紀までの間に行われたペルシア語作品の出版物を網羅的に調査し、その出版者、出版の経緯、出版物の読者層、出版の部数と流通、出版に付された作品のジャンル等の観点から整理する。とくに最後者の点は重要であり、近代インド諸語が文語としての役割を担いはじめる環境の中で、ペルシア語が担っていた役割は、その時代の文化状況を端的に示していると考えられるからである。これらの作業によって引き出される知見を、他の諸言語、特に同じアラビア文字で表記されるアラビア語、ウルドゥー語の状況と対照しつつ意味づける。

(2) 18 世紀末から 19 世紀までの間に行われたペルシア語作品の出版物を網羅的に調査する基礎作業として、次のような書誌を参照して、コーパスを作成する: M. M. A. Ali, *Catalogue of the Persian Books and Manuscripts in the Library of the Asiatic Society of Bengal*, Calcutta, 1890; E. Edwards, *Catalogue of Persian printed books in the library of the British Museum*, London, 1922; A. J. Arberry, *Catalogue of the library of the India Office*. Vol. II. - Part VI. Persian books, London, 1937. この作業と並行して、出版者自身の出版目録（たとえばナワル・キショール社出版目録 (1876 年、ラクナウー）など）も探索・入手し、コーパス作成に供する。また当該時代の南アジアにおけるアラビア語、ウルドゥー語の出版の状況を参照系として調査する。これは、この二つの言語がペルシア語と同じくアラビア文字で表記されること、いずれの言語も何らかの形でイスラーム文化と関わりを備えていること、による。また出版者を取り巻く歴史的状況についても調査を進める。

(3)　コーパス作成の過程で、出版物の内容を確認し、それが古典籍である場合には作品の同定も行う。作品の同定に資するため、必要に応じて原典に遡及する。関連する公刊史料は網羅的に購入して、所属先に備える。またその原典が未公刊の作品である場合には、欧州の研究機関（大英図書館、フランス国立図書館）等に所蔵される写本資料のマイクロフィルムを購入するなどして整備する。購入したマイクロフィルム等はデジタルスキャ

ンによって電算化し、研究に供する。インド等マイクロフィルム等の入手が難しい機関（ハイデラーバード公共図書館、K. R. カマ東洋研究所図書館等）については、現地におもむいて文献調査を行う。また所属先に整備できない文献を調査するため、東洋文庫等、国内の研究機関におもむいて調査する。

４．研究成果

(1)　南アジアのペルシア語著作を網羅するために必要な工具書、目録類を多数入手した。また古典籍作品の同定に資するため、関連する古典籍作品の公刊本を多数入手した。さらに未公刊の古典籍については、欧州の研究機関等に所蔵される写本資料の複写を入手した（大英図書館、ボドリーアン図書館、フランス国立図書館）。インドの研究機関等からはマイクロフィルム等の入手が難しいので、実地調査におもむき、現物を調査し、可能な場合には当方の機材によって写真撮影することで、所要の資料を入手した（サーラール・ジャング博物館、アーンドラ・プラデーシュ州古文書館、アーンドラ・プラデーシュ州立東洋写本研究所図書館、K. R. カマー東洋研究所図書館）。

(2)　上記の資料をもとにして、研究課題の前提であるペルシア語文化の歴史における南アジアの所産を特徴づけるべく、近世のインドと西アジアを包摂するペルシア語文化圏の動態を、デカン地方で著された歴史書を手がかりとして考察し、これを学会発表として公表した。また印刷・出版の時代に先立つ古典籍や書物・写本、知識の継承のありようも本研究課題に必須の前提事項であるため、ムガル帝国時代の写本と絵画について考察し、これを論文として公表した。

(3)　上記の資料をもとにして、18 世紀末から 19 世紀までの間に南アジアで刊行されたペルシア語作品の出版物を網羅的に調査するための基礎作業として、コーパス作成の作業を進めた。

(4)　上記の資料をもとにして、ペルシア語だけでなく、当該時代の南アジアにおけるアラビア語、ウルドゥー語の出版の状況についても調査した。

(5)　本研究課題の応募以降、国外において関連する新たな研究が相次いで公表されたので、それらを入手し、研究動向の把握に努め、本研究課題の方向性を検討する材料とした (Farina Mir, *The social space of language: Vernacular culture in British colonial Punjab*, Berkeley, Los Angeles & London, 2010; Nile Green, *Bombay Islam: The religious economy ofthe West Indian Ocean, 1840-1915*, Cambridge, 2011; R. Venkatachalapathy, *The province of the book: Scholars, scribes, and scribblers in Colonial Tamilnadu*, Delhi, 2012; James L. Gelvin & Nile Green (eds.), *Global Muslims in the age of steam and print, 1850-1930*, Berkeley, 2013.)。とくに本研究の最終段階において、研究課題に密接に関連する研究成果が 2012 年ないし 2013 年にイランで発表されたことが判明した（`Arif Nawshahi, *Kitab-shinasi-yi Athar-i Farsi-yi Chap-shudah dar Shibh-i Qarrah (Hind, Pakistan, Bangladesh) az 1160-1386 h. sh./1195-1428 h./1791-2007, 4 vols., Tihran, 1391 sh (2012/13)*. タイトル日本語訳『1791-2007 年にインド亜大陸（インド、パキスタン、バングラデシュ）で印刷されたペルシア語著作の書誌』)。この著作の内容は、本研究によって作成してきた出版物コーパスの新規性に関わるので、速やかに検討に付する予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５件）

① 真下裕之、ムガル朝インドの写本と絵画、小杉泰・林佳世子編『イスラーム 書物の歴史』、名古屋大学出版会、査読無、2014、pp. 279-297

② MASHITA, Hiroyuki、Asad Beg Qazvini、*Encyclopaedia of Islam, THREE*、Brill Online、査読有、掲載確定、http://brillonline.com/

③ 真下裕之監修（二宮文子・真下裕之・和田郁子訳）、アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注 (2)、紀要（神戸大学文学部）、査読無、41 号、2014、pp. 75-120

④ 真下裕之監修（二宮文子・真下裕之・和田郁子訳）、アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注 (1)、紀要（神戸大学文学部）、査読無、40 号、2013、pp. 69-118

⑤ 真下裕之、ムガル帝国におけるバフシ職について：大バフシ職の運用における人的要因、東洋史研究、査読有、71 巻 3 号、2012、pp. 85-130

〔学会発表〕（計　５件）

① 真下裕之、ムガル帝国における君主と武人：マンサブ制度における人的紐帯の諸側面、「ユーラシア諸帝国における君主と軍事集団の展開」研究会、2014 年 3 月 30 日、神戸大学大学院人文学研究科

② 真下裕之、インドにおけるイスラーム関連資料の現状について、地域歴史資料国際シンポジウム「地域の歴史資料をとりまく世界の諸相：史料保存を中心に考える」、2013 年 12 月 1 日、神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ

③ 真下裕之、ムガル帝国の軍事史研究における最近の諸問題、「ユーラシア諸帝国における君主と軍事集団の展開」研究会、2012 年 12 月 22 日、九州大学 文学部

④　真下裕之、17 世紀初頭デカン地方のペルシア語史書 *Tadhkirat al-Muluk* について、「近世イスラーム国家と多元的社会」第 2 回研究会、2012 年 10 月 27 日、東京外国語大学 本郷サテライト
⑤　真下裕之、「インド史の歴史」：前近代インド・イスラーム社会における通史的歴史叙述、神戸大学イスラーム地域研究会(KOBE-IAS)第 6 回研究会（招待講演）、2012 年 2 月 13 日、神戸大学大学院国際文化学研究科

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
真下　裕之（MASHITA, Hiroyuki）
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：７０３０３８９９

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：